

# 源氏物語

若紫

紫式部

青空文庫



春の野のうらわか草に親しみていと

ほどかに恋もなりぬる  
(晶子)

源氏は瘡病にかかっていた。いろいろとまじないもし、僧の加持も受けていたが効験がなくて、この病の特徴で発作的にたびたび起こってくるのをある人が、

「北山の某という寺に非常に上手な修験僧がおります、去年の夏この病気がはやりました時など、まじないも効果がなく困っていた人がずいぶん救われました。病気をこじらせますと癒りにくくなりますから、早くためしてごらんになったらいいでしよう」

こんなことを言つて勧めたので、源氏はその山から修験者を自邸へ招こうとした。

「老体になつておりまして、岩窟を一步出ることもむずかしいのですから」  
僧の返辞はこんなだつた。

「それではしかたがない、そつと微行で行つてみよう」

こう言つていた源氏は、親しい家司四、五人だけを伴つて、夜明けに京を立て出かけたのである。郊外のやや遠い山である。これは三月の三十日だつた。京の桜はもう散つて

いたが、途中の花はまだ盛りで、山路を進んで行くにしたがって溪たにだに々をこめた霞かすみにも都の霞かすみにない美があった。窮きゆうくつ屈な境遇の源氏はこうした山歩きの経験けいけんがなくて、何事も皆珍めづしくおもしろく思われた。修験僧の寺は身にしむような清さがあつて、高い峰を負つた巖窟いわくの中に聖人しようにんははいつていた。

源氏は自身のだれであるかを言わず、服装をはじめ思い切つて簡単にして来ているのであるが、迎えた僧は言つた。

「あ、もつたいない、先日お召しになりました方様でいらつしやいましょう。もう私はこの世界のことは考えないものですから、修験の術も忘れておりますのに、どうしてまあわざわざおいでくださったのでしょうか」

驚きながらも笑えみを含んで源氏を見ていた。非常に偉い僧なのである。源氏を形どつた物を作つて、瘡病わらわやみをそれに移す祈禱きとうをした。加持かじなどをしていゝる時分にはもう日が高く上つていた。

源氏はその寺を出て少しの散歩を試みた。その辺をながめると、ここは高い所であつたから、そこここに構かまえられた多くの僧坊が見渡されるのである。螺旋らせん状になつた路みちのついたこの峰のすぐ下に、それもほかの僧坊と同じ小柴垣こしばがきではあるが、目だつてきれいに廻めぐ

らされていて、よい座敷風の建物と廊とが優美に組み立てられ、庭の作りようなどもきわめて凝こった一構えがあった。

「あれはだれの住んでいる所なのかね」

と源氏が問うた。

「これが、某僧都そうずがもう二年ほど引きこもっておられる坊でございます」

「そうか、あのりっぱな僧都、あの人の家なんだね。あの人に知れてはきまりが悪いね、こんな体裁で来ていて」

などと、源氏は言った。美しい侍童などがたくさん庭へ出て来て仏の闕伽あかだな棚に水を盛ったり花を供えたりしているのもよく見えた。

「あすこの家に女がおりますよ。あの僧都がよもや隠し妻を置いてはいらつしやらないでしょうが、いったい何者でしょう」

こんなことを従者が言った。崖がけを少しおりて行つてのぞく人もある。美しい女の子や若い女房やら召使の童女やらが見えると言った。

源氏は寺へ帰って仏前の勤めをしながら昼になるともう発作ほつきが起こるころであるがと不安だった。

「氣をお紛まぎらしになつて、病氣のことをお思いにならないのがいちばんよろしゅうござい  
ますよ」

などと人が言うので、後ろのほうの山へ出て今度は京のほうをながめた。ずっと遠くま  
で霞かすんでいて、山の近い木立ちなどは淡く煙つて見えた。

「絵によく似ている。こんな所に住めば人間の穢きたない感情などは起こしようがないだろう」  
と源氏が言うと、

「この山などはまだ浅いものでございます。地方の海岸の風景や山の景色けしきをお目にかけま  
したら、その自然からお得えになるところがあつて、絵がずいぶん御上達なさいますでしよ  
うと思います。富士、それから何々山」

こんな話をする者があつた。また西のほうの国々のすぐれた風景を言つて、浦々の名を  
たくさん並べ立てる者もあつたりして、だれも皆病への関心から源氏を放そうと努めてい  
るのである。

「近い所では播磨はりまの明石あかしの浦がよろしゅうございます。特別に変わったよさはありません  
が、ただそこから海のほうをながめた景色はどこよりもよく纏まとまっております。前播磨守入さきの  
道が大事な娘を住ませる家はたいしたものがございます。二代ほど前は大臣だった家

筋で、もつと出世すべきはずの人なんです、変わり者で仲間の交際なんかをまきらつて近衛このえの中将を捨てて自分から願つて出てなつた播磨守なんです、国の者に反抗されたりして、こんな不名誉なことになつては京へ帰れないと言つて、その時に入道した人ですが、坊様になつたのなら坊様らしく、深い山のほうへでも行つて住めばよきそんなものですが、名所の明石の浦などに邸宅を構えております。播磨にはずいぶん坊様に似合つた山なんかが多いのですがね、変わり者をてらつてそうするかというところにも訳はあるのです。若い妻子が寂しがらうという思いやりなのです。そんな意味でずいぶん贅ぜいたく沢すまいに住居なども作つてございます。先日父の所へまいりました節、どんなふうにいるかも見たいので寄つてみました。京にいますうちは不遇なようでしたが、今の住居などはすばらしいもので、何といつても地方長官をしていますうちに財産ができていたのですから、生しょうが涯いの生活に事を欠かない準備は十分にしておいて、そして一方では仏弟子ぶつでしとして感心に修行も積んでいるようです。あの人だけは入道してから真価が現われた人のように見受け  
ます」

「その娘というのはどんな娘」

「まず無難な人らしゅうございます。あのをの代々の長官が特に敬意を表して求婚する

のですが、入道は決して承知いたしません。自分の一生は不遇だったのだから、娘の未来だけはこうありたいという理想を持っている。自分が死んで実現が困難になり、自分の希望しない結婚でもしなければならなくなった時には、海へ身を投げてしまえと遺言をしているそうです」

源氏はこの話の播磨の海べの変わり者の入道の娘がおもしろく思えた。

「竜宮の王様のお后になるんだね。自尊心の強いつたらないね。困り者だ」

などと冷評する者があつて人々は笑っていた。話をした良清は現在の播磨守の息子で、さきには六位の蔵人をしていたが、位が一階上がって役から離れた男である。ほかの者は、

「好色な男なのだから、その入道の遺言を破りうる自信を持っているのだろう。それでよく訪問に行ったりするのだよ」

とも言っていた。

「でもどうかね、どんなに美しい娘だといわれていても、やはり田舎者らしくろうよ。小さい時からそんな所に育つし、頑固な親に教育されているのだから」

こんなことも言う。



「しかし母親はりっぱなのだろう。若い女房や童女など、京のよい家にいた人などを何かの縁故からたくさん呼んだりして、たいそうなことを娘のためにしているらしいから、それでただの田舎娘ができ上がったら満足していられないわけだから、私などは娘も相当な価値のある女だろうと思うね」

だれかが言う。源氏は、

「なぜお后にしなければならぬのだろうね。それでなければ自殺させるといふ凝り固まりでは、ほかから見てもよい気持ちはしないだろうと思う」

などと言いながらも、好奇心が動かないようでもなさそうである。平凡でないことに興味を持つ性質を知っている家司けいしたちは源氏の心持ちをそう観察していた。

「もう暮れに近うなっておりますが、今日は御病きよう気が起こらないで済むのでございませう。もう京へお帰りになりましたら」

と従者は言ったが、寺では聖人が、

「もう一晩静かに私に加持をおさせになつてからお帰りになるのがよろしゆうございます」と言った。だれも皆この説に賛成した。源氏も旅で寝ることははじめてなのでうれしくて、

「では帰りは明日に延ばそう」

こう言つていた。山の春の日はことに長くてつれづれでもあつたから、夕方になつて、この山が淡霞うすがすみに包まれてしまつた時刻に、午前にながめた小柴垣こしばがきの所へまで源氏は行つて見た。ほかの従者は寺へ歸して惟光これみつだけを供につれて、その山莊をのぞくとこの垣根のすぐ前になつてゐる西向きの座敷に持仏じぶつを置いてお勤めをする尼がいた。簾すだれを少し上げて、その時に仏前へ花が供えられた。室の中央の柱に近くすわつて、脇息きようそくの上を経巻を置いて、病苦のあるふうでそれを讀む尼はただの尼とは見えない。四十ぐらいで、色は非常に白くて上品に瘦やせてはいるが頬ほおのあたりはふっくりとして、目つきの美しいのとともに、短く切り捨ててある髪すその裾すそのそろつたのが、かえつて長い髪よりも艶えんなものであるという感じを与えた。きれいな中年の女房が二人いて、そのほかにこの座敷を出たりはいつたりして遊んでゐる女の子が幾人かあつた。その中に十歳とおぐらいに見えて、白の上うすきに淡黄の柔らかい着物を重ねて向こうから走つて来た子は、さつきから何人も見た子供とはいつしよに言うことのできな麗質を備えていた。将来はどんな美しい人になるだろうと思われるところがあつて、肩の垂たれ髪たの裾たが扇をひろげたようにたくさんでゆらゆらとしていた。顔は泣いたあとのようで、手でこすつて赤くなつてゐる。尼さんの横へ来て

立つと、

「どうしたの、童女たちのことで憤おこっているの」

こう言つて見上げた顔と少し似たところがあるので、この人の子なのであらうと源氏は思つた。

「雀すずめの子を犬君いぬぎが逃がしてしまいましたの、伏籠ふせごの中に置いて逃げないようにしてあつたのに」

たいへん残念そうである。そばにいた中年の女が、

「またいつもの粗相そそごうやさんがそんなことをしてお嬢様にしかられるのですね、困つた人です。雀はどちらのほうへ参りました。だいぶ馴なれてきてかわゆうございましたのに、外へ出ては山の鳥に見つかつてどんな目にあわされますか」

と言いながら立つて行つた。髪かみのゆらゆらと動く後ろ姿も感じのよい女である。少納しょうな言ごんの乳母めのとと他の人が言っているから、この美しい子供の世話役なのであらう。

「あなたはまあいつまでも子供らしくて困つた方ね。私の命いのちがもう今日明日かと思われるのに、それは何とも思わないで、雀のほうほうが惜しいのだね。雀を籠かごに入れておいたりすることは仏様のお喜びにならないことだと私はいつも言っているのに」

と尼君は言つて、また、

「いゝいゝ」

と言つと美しい子は下へすわつた。顔つきが非常にかわいくて、眉まゆのほかに伸びたところ、子供らしく自然に髪が横撫よこなでになつてゐる額にも髪かみの性質にも、すぐれた美がひそんでゐると見えた。大人おとなになつた時を想像してすばらしい佳人の姿も源氏の君は目に描いてみた。なぜこんな自分の目がこの子に引き寄せられるのか、それは恋しい藤壺ふじつぼの宮によく似てゐるからであると気がついた刹那せつなにも、その人への思慕の涙が熱く頬ほおを伝わつた。尼君は女の子の髪をなでながら、

「梳すかせるのもうるさがるけれどよい髪だね。あなたがこんなふうにあまり子供らしいことでは心配してゐる。あなたの年になればもうこんなふうでない人もあるのに、亡なくなつたお姫さんは十二でお父様に別れたのだけれど、もうその時には悲しみも何もよくわかる人になつていましたよ。私が死んでしまつたあとであなたはどうなるのだろう」

あまりに泣くので隙見すきみをしてゐる源氏までも悲しくなつた。子供心にもさすがにじつとしばらく尼君の顔をながめ入つて、それからうつむいた。その時に額からこぼれかかつた髪がやつつやと美しく見えた。

生おひ立たんありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えんそらなき

一人の中年の女房が感動したふうで泣きながら、

初草の生ひ行く末も知らぬまにいかでか露の消えんとすらん

と言った。この時に僧都そうずが向こうの座敷のほうから来た。

「この座敷はあまり開あけひろげ過ぎています。今日に限ってこんなに端のほうにおいでになつたのですね。山の上の聖人の所へ源氏の中將が瘡わらわやみ病びょうのまじないにおいでになつたという話を私は今はじめて聞いたのです。ずいぶん微行でいらつしやつたので私は知らないで、同じ山にいながら今まで伺候もしませんでした」

と僧都は言った。

「たいへん、こんな所をだれか御一行の人がのぞいたかもしれない」

尼君のこう言うのが聞こえて御簾みすはおろされた。

「世間で評判の源氏の君のお顔を、こんな機会に見せていただいたらどうですか、人間生活と絶縁している私らのような僧でも、あの方のお顔を拝見すると、世の中の歎なげかわしいことなどは皆忘れることができ、長生きのできる気のするほどの美貌びぼうですよ。私はこれからまず手紙で御挨拶ごあいさつをすることにしましょう」

僧都がこの座敷を出て行く気配けはいがするので源氏も山上の寺へ帰った。源氏は思った。自分には可憐な人を発見することができた、だから自分といっしょに来ていた若い連中は旅というものをしたがるのである、そこで意外な収穫を得るのだ、たまさかに京を出て来ただけでもこんな思いがけないことがあると、それで源氏はうれしかった。それにしても美しい子である、どんな身分の人なのであろう、あの子を手もとに迎えて逢あいがたい人の恋しさが慰められるものならぜひそうしたいと源氏は深く思ったのである。

寺で皆が寢床についていると、僧都の弟子でしが訪問して来て、惟光これみつに逢あいたいと申し入れた。狭い場所であったから惟光へ言う事が源氏にもよく聞こえた。

「手前どもの坊の奥の寺へおいでになりましたことを人が申しますのでただ今承知いたしました。すぐに伺うべきでございますが、私がこの山におりますことを御承知のあなた様が素通りをあそばしたのは、何かお氣に入らないことがあるかと御遠慮をする心もござい

ます。御宿泊の設けも行き届きませんでも当坊でさせていたただきたいものでございます」と言うのが使いの伝える僧都の挨拶だった。

「今月の十幾日ごろから私は瘡病わらわやみにかかつておりましたが、たびたびの発作で堪えられなくなりまして、人の勧めどおりに山へ参つてみましたが、もし効験ききめが見えませんでした。した時には一人の僧の不名誉になることですから、隠れて来ておりました。そちらへも後刻伺うつもりです」

と源氏は惟光に言わせた。それから間もなく僧都が訪問して来た。尊敬される人格者で、僧ではあるが貴族出のこの人に軽い旅装で逢うことを源氏はきまり悪く思った。二年越しの山籠りやまこもりの生活を僧都は語つてから、

「僧の家というものはどうせ皆寂しい貧弱なものです、ここよりは少しきれいな水の流れなども庭にはできておりますから、お目にかきたいと思うのです」

僧都は源氏の来宿を乞うてやまなかつた。源氏を知らないあの女の人たちにたいそうな顔の吹聴ふいちようなどをされていたことを思うと、しりごみもされるのであるが、心を惹いた少女のことも詳しく知りたいと思つて源氏は僧都の坊へ移つて行つた。主人の言葉どおり庭の作り一つをいってもここは優美な山荘であつた、月はないころであつたから、流れ

のほとりに篝かがりを焚たかせ、燈籠とうろうを吊つらせなどしてある。南向きの室を美しく裝飾して源氏の寢室ができていた。奥の座敷から洩もれてくる薫香くんこうのにおいと仏前に焚かれる名香の香が入り混じって漂っている山荘に、新しく源氏の追い風が加わったこの夜を女たちも晴れがましく思った。

僧都は人世の無常さと来世の頼もしさを源氏に説いて聞かせた。源氏は自身の罪の恐ろしさが自覚され、来世で受ける罰の大きさを思うと、そうした常ない人生から遠ざかったこんな生活に自分もはいつてしまいたいなどと思いつながらも、夕方に見た小さい貴女きじよが心にかかつて恋しい源氏であった。

「ここへ来ていらつしやるのはどなたなんですか、その方たちと自分とが因縁のあるというような夢を私は前に見たのですが、なんだか今日こちらへ伺なほつて謎なぞの糸口を得た気がします」

と源氏が言うと、

「突然な夢のお話ですね。それがだれであるかをお聞きになっても興きがおさめになるだけでございます。前の按察使大納言はもうずっと早く亡なくなったのでございますからご存じはありますまい。その夫人が私の姉です。未亡人になってから尼になりました、それ



がこのごろ病気なものですから、私が山にこもったきりになっているので心細がつてこちらへ来ているのです」

僧都の答えはこうだった。

「その大納言にお嬢さんがおありになるということでしたが、それはどうなすつたのですか。私は好色から伺うのじやありません、まじめにお尋ね申し上げるのです」

少女は大納言の遺子であろうと想像して源氏が言うど、

「ただ一人娘がございました。亡くなりましてもう十年余りになりますでしょうか、大納言は宮中へ入れたいように申して、非常に大事にして育てていたのですがそのままで死にますし、未亡人が一人で育てていますうちに、だれがお手引きをしたのか ひょうぶぎょう 兵部卿の宮が通つていらつしやるようになりまして、それを宮の御本妻はなかなか権力のある夫人で、やかましくお言いになって、私の姪めいはそんなことからいろいろ苦勞が多くて、物思**い**ばかりをしたあげく亡くなりました。物思**い**で病気が出るものであることを私は姪を見てよくわかりました」

などと僧都は語つた。それではあの少女は昔の按察使大納言の姫君と兵部卿の宮の間にできた子であるに違いないと源氏は悟つたのである。藤壺の宮の兄君の子であるがために

その人に似ているのであろうと思うといつそう心の惹かれるのを覚えた。身分のきわめてよいのがうれしい、愛する者を信じようとせずに疑いの多い女でなく、無邪気な子供を、自分が未来の妻として教養を与えていくことは楽しいことであろう、それを直ちに実行したいという心に源氏はなつた。

「お気の毒なお話ですね。その方には忘れ形見がなかつたのですか」

なお明確に少女のだれであるかを知らうとして源氏は言うのである。

「亡くなりますころに生まれました。それも女です。その子供が姉の信仰生活を静かにさせません。姉は年を取つてから一人の孫娘の将来ばかりを心配して暮らしております」

聞いている話に、夕方見た尼君の涙を源氏は思い合わせた。

「妙なことを言い出すようですが、私にその小さいお嬢さんを、託していただけないかとお話ししてくださいませんか。私は妻について一つの理想がありまして、ただ今結婚はしていませんが、普通の夫婦生活なるものは私に重荷に思えまして、まあ独身もののような暮らし方ばかりをしているのです。まだ年がつり合わぬなどと常識的に判断をなすつて、失礼な申し出だと思召すおぼしめでしょうか」

と源氏は言つた。

「それは非常に結構なことでございますが、まだまだとても幼稚なものでございますから、仮にもお手もとへなど迎えていただけなものではありません。まあ女というものは良人のよい指導を得て一人前になるものなのですから、あながち早過ぎるお話とも何とも私は申されません。子供の祖母と相談をいたしましたしてお返辞をするをいたしましたしよう」

こんなふうにてきばき言う人が僧形の厳めしい人であるだけ、若い源氏には恥ずかしくて、望んでいることをなお続けた言うことができなかつた。

「阿弥陀様がいらつしやる堂で用事のある時刻になりました。初夜の勤めがまだしてございません。済ませましてまた」

こう言つて僧都は御堂のほうへ行つた。

病後の源氏は気分もすぐれなかつた。雨がすこし降り冷ややかな山風が吹いてそのころから滝の音も強くなつたように聞かれた。そしてやや眠そうな読経の聲が絶え絶えに響いてくる、こうした山の夜はどんな人にも物悲しく寂しいものであるが、まして源氏はいろいろな思いに悩んでいて、眠ることはできないのであつた。初夜だと言つたが実際はその時刻よりも更けていた。奥のほうの室にいる人たちも起きたままでいるのが気配で知れていた。静かにしようと思つて配っているらしいが、数珠が脇息に触れて鳴る音などが

して、女の起居の衣摺れもほのかになつかしい音に耳へ通ってくる。貴族的なよい感じである。

源氏はすぐ隣の室でもあつたからこの座敷の奥に立ててある二つの屏風の合わせ目を少し引きあけて、人を呼ぶために扇を鳴らした。先方は意外に思ったらしいが、無視しているように思わせたかと思つて、一人の女が膝行寄つて来た。襖子から少し遠いところで、

「不思議なこと、聞き違えかしら」

と言うのを聞いて、源氏が、

「私の導いてくださる道は暗いところもまちがいなく行きうるといふのですから」

という声の若々しい品のよさに、奥の女は答えることもできない気はしたが、

「何のお導きでございましょう、こちらでは何もわかつておりませんが」

と言つた。

「突然ものを言いかけて、失敬だと思ひになるのはごもつともですが、

初草の若葉の上を見つるより旅寝の袖も露ぞ乾かぬ

と申し上げてくださいませんか」

「そのようなお言葉を頂戴ちようだいあそばす方がいらつしやらないことはご存じのようですが、どなたに」

「そう申し上げるわけがあるのだとお思いになつてください」

源氏がこう言うので、女房は奥へ行つてそう言った。

まあ艶えんな方らしい御挨拶である、女王にようさんがもう少し大人になっているように、お客様は勘違いをしていられるのではないか、それにしても若草にたとえた言葉がどうして源氏の耳にはいったのであろうと思つて、尼君は多少不安な気もするのである。しかし返歌のおそくなることだけは見苦しいと思つて、

「枕結まくゆふ今宵こよひばかりの露けさを深山みやまの苔こけにくらべざらなん

とてもかわく間などはございませぬのに」

と返辞をさせた。

「こんなお取り次ぎによつての会談は私に経験のないことです。失礼ですが、今夜こちらで御厄介ごやつかいになりましたのを機会にまじめに御相談のしたいことがございます」

と源氏が言う。

「何をまちがえて聞いていらつしやるのだろうか。源氏の君にもものを言うような晴れがましいこと、私には何もお返辞なんかできるものではない」

尼君はこう言っていた。

「それでも冷淡なお扱いをするとお思ひになるでございましょうから」

と言つて、人々は尼君の出るのを勧めた。

「そうだね、若い人こそ困るだろうが私など、まあよい。丁寧に言つていらつしやるのだから」

尼君は出て行つた。

「出来心的な軽率な相談を持ちかける者だとお思ひになるのがかえつて当然なような、こんな時に申し上げるのは私のために不利なんです、誠意をもつてお話しいたそうとしておりますことは仏様がご存じでしょう」

と源氏は言つたが、相当な年配の貴女が静かに前にいることを思うと急に希望の件が持

ち出されないのである。

「思いがけぬ所で、お泊まり合わせになりました。あなた様から御相談を承りますのを前ぜ生んしょうに根を置いていないこととどうして思えましょう」

と尼君は言った。

「お母様をお亡なくしになりましたとお気の毒な女王さんを、お母様の代わりとして私へお預けくださいませんか。私も早く母や祖母に別れたものですから、私もじつと落ち着いた気持ちもなく今日に至りました。女王さんも同じような御境遇なんですから、私たちが将来結婚することを今から許して置いていただきたいと、私はこんなことを前から御相談したかったので、今は悪くおとりになるかもしれない時である、折おりがよろしくないと思いながら申し上げてみます」

「それは非常にうれしいお話でございますが、何か話をまちがえて聞いておいでになるのではないかと思えますと、どうお返辞を申し上げてよいかに迷います。私のような者一人をたよりにしております子供が一人おりますが、まだごく幼稚なもので、どんなに寛大なお心でも、将来の奥様にお擬しになることは無理でございますから、私のほうで御相談に乗せていただきようもございません」

と尼君は言うのである。

「私は何もかも存じております。そんな年齢の差などはお考えにならずに、私がどれほどそうなるのを望むかという熱心の度を御覧ください」

源氏がこんなにつても、尼君のほうでは女王の幼齡なことを知らないでいるのだと思う先入見があつて源氏の希望を問題にしようとはしない。僧都そうずが源氏の部屋へやのほうへ来るらしいのを機会に、

「まあよろしいです。御相談にもう取りかかったのですから、私は実現を期します」

と言つて、源氏は屏風びょうぶをもとのように直して去つた。もう明け方になつていた。法華ほっけの三昧さんまいを行なう堂の尊い懺せんぼう法の声が山おろしの音に混じり、滝がそれらと和する響きを作っているのである。

吹き迷ふ深山みやまおろしに夢さめて涙催す滝の音かな

これは源氏の作。



「さしぐみに袖濡らしける山水にすめる心は騒ぎやはする

もう馴れ切つたものですよ」

と僧都は答えた。

夜明けの空は十二分に霞んで、山の鳥声がどこで啼くとなしに多く聞こえてきた。都人びとには名のわかりにくい木や草の花が多く咲き多く地に散っていた。こんな深山の錦の上へ鹿しかが出て来たりするのも珍しいながめで、源氏は病苦からまったく解放されたのである。聖人は動くことも容易でない老体であったが、源氏のために僧都の坊へ来て護身の法を行なつたりしていた。嗚々かれがれ々々な所々が消えるような声で経を讀んでいるのが身にしみもし、尊くも思われた。経は陀羅尼である。

京から源氏の迎えの一行が山へ着いて、病気の全快された喜びが述べられ、御所のお使いも来た。僧都は珍客のためによい菓子くさくさを種々た作らせ、溪間へまでも珍しい料理の材料を求めに人を出して饗応きようおうに骨を折つた。

「まだ今年じゆうは山籠りのお誓いがしてあって、お帰りの際に京までお送りしたいのができませんから、かえつて御訪問が恨めしく思われるかもしれません」

などと言いながら僧都は源氏に酒をすすめた。

「山の風景に十分愛着を感じているのですが、陛下に御心配をおかけ申すのももったいないことですから、またもう一度、この花の咲いているうちに参りましょう、

宮人に行きて語らん山ざくら風よりさきに来ても見るべく」

歌の発声も態度もみごとな源氏であつた。僧都が、

優曇華うとんげの花まち得たるここちして深山桜みやまに目こそ移らね

と言うと源氏は微笑しながら、

「長い間にまれに一度咲くという花は御覧になることが困難でしょう。私とは違います」と言つていた。巖窟がんくつの聖人しょうにんは酒杯を得て、

奥山の松の戸ぼそを稀まれに開あけてまだ見ぬ花の顔を見るかな

と言つて泣きながら源氏をながめていた。聖人は源氏を護る法のこめられてある独鈷を献上した。それを見て僧都は聖徳太子が百済の国からお得になつた金剛子の数珠に宝玉の飾りのついたのを、その当時のいかにも日本の物らしくない箱に入れたままで薄物の袋に包んだのを五葉の木の枝につけた物と、紺瑠璃などの宝石の壺へ薬を詰めた幾個かを藤や桜の枝につけた物と、山寺の僧都の贈り物らしい物を出した。源氏は巖窟の聖人をはじめめとして、上の寺で経を読んだ僧たちへの布施の品々、料理の詰め合わせなどを京へ取りにやつてあつたので、それらが届いた時、山の仕事を下級労働者までが皆相当な贈り物を受けたのである。なお僧都の堂で誦経をしてもらうための寄進もして、山を源氏の立つて行く前に、僧都は姉の所に行つて源氏から頼まれた話を取り次ぎしたが、

「今のところでは何ともお返辞の申しようがありません。御縁がもしありましたならもう四、五年して改めておつしやつてくだすつたら」

と尼君は言うだけだつた。源氏は前夜聞いたのと同じような返辞を僧都から伝えられて自身の気持ちの理解されないことを歎いた。手紙を僧都の召使の小童に持たせてやった。

夕まぐれほのかに花の色を見て今朝は霞の立ちぞわづらふ

という歌である。返歌は、

まことにや花のほとりは立ち憂きと霞むる空のけしきをも見ん

こうだった。貴女らしい品のよい手で飾りけなしに書いてあった。

ちやうど源氏が車に乗ろうとするころに、左大臣家から、どこへ行くともなく源氏が京を出かけて行ったので、その迎えとして家司の人々や、子息たちなどがおおぜい出て来た。頭中將、左中弁またそのほかの公達もいっしょに来たのである。

「こうした御旅行などにはぜひお供をしようと思っておりますのに、お知らせがなくて」  
などと恨んで、

「美しい花の下で遊ぶ時間が許されないのですぐにお帰りのお供をするのは惜しくてならぬ  
いことですね」

とも言っていた。岩の横の青い苔の上に新しく来た公達は並んで、また酒盛りが始めら

れたのである。前に流れた滝も情趣のある場所だった。頭中将は懐ふところに入れてきた笛を出して吹き澄ましていた。弁は扇拍子をとつて、「葛城かつらぎの寺の前なるや、豊浦とよらの寺の西なるや」という歌を歌っていた。この人たちは決して平凡な若い人ではないが、悩ましそうに岩へよりかかっている源氏の美に比べてよい人はだれもなかった。いつも箏ひちりき策を吹く役にあたる隨身みづみがそれを吹き、またわざわしやう笙の笛を持ち込んで来た風流好きもあつた。僧そう都が自身で琴きん（七絃しちげんの唐風の楽器）を運んで来て、

「これをただちよつとだけでもお弾ひきくだすつて、それによって山の鳥に音楽の何であるかを知らせてやつていただきたい」

こう熱望するので、

「私はまだ病気に疲れています」

と言いながらも、源氏が快く少し弾いたのを最後として皆帰つて行つた。名残なごり惜しく思つて山の僧俗は皆涙をこぼした。家の中では年を取つた尼君主にきみ従がまだ源氏のような人に出逢であつたことのない人たちばかりで、その天才的な琴の音をも現実の世のものでないと評し合つた。僧都も、

「何の約束事でこんな末世にお生まれになつて人としてのうるさい束縛や干渉をお受けに

ならなければならぬかと思つてみると悲しくてならない」

と源氏の君のことを言つて涙をぬぐつていた。兵部卿ひょうぶきょうの宮の姫君は子供心に美しい人であると思つて、

「宮様よりも御様子がごりつぱね」

などとほめていた。

「ではあの方のお子様におなりなさいまし」

と女房が言うとうなずいて、そうなつてもよいと思う顔をしていた。それからは人形遊びにんぎょあそびをして、絵をかいても源氏の君きみというのをこしらえて、それにはきれいな着物を着せて大事がった。

帰京した源氏はすぐに宮中へ上がつて、病中の話をいろいろと申し上げた。ずいぶんきつ瘦やせてしまったと仰せられて帝みかどはそれをお気におかけあそばされた。聖人の尊敬すべききとう祈き禱とう力ちからなどについての御下問もあつたのである。詳しく申し上げると、

「阿闍梨あじやりにもなつていいだけの資格がありそうだね。名誉を求めないで修行一方で来た人なんだらう。それで一般人に知られなかつたのだ」

と敬意を表しておいになつた。左大臣も御所に来合せていて、

「私もお迎えに参りたく思つたのですが、御微行おしのびの時にはかえつて御迷惑かとも思ひまして遠慮をしました。しかしまだ一日二日は静かにお休みになるほうがよろしいでしょう」と言つて、また、

「ここからのお送りは私がいたしましょう」

とも言つたので、その家へ行きたい気もなかつたが、やむをえず源氏は同道して行くことにした。自分の車へ乗せて大臣自身はからだを小さくして乗つて行つたのである。娘のかわいさからこれほどまでに誠意を見せた待遇を自分にしてくれるのだと思うと、大臣の親心なるものに源氏は感動せずにはいられなかつた。

こちらへ退出して来ることを予期した用意が左大臣家にできていた。しばらく行つて見なかつた源氏の目に美しいこの家がさらに磨き上げられた気もした。源氏の夫人は例のとおりのほかの座敷へはいつてしまつて出て来ようとしなない。大臣がいろいろとなだめてやつと源氏と同席させた。絵にかいた何かの姫君というようにきれいに飾り立てられていて、身動きすることも自由でないようにきちんとした妻であつたから、源氏は、山の二日の話をするとすれぱすぐに同感を表してくれるような人であれば情味が覚えられるであろう、いつまでも他人に対する羞恥しゆうちと同じものを見せて、同棲どうせいの歳月は重なつてもこの傾向

がますます目だつてくるばかりであると思うと苦しくて、

「時々普通の夫婦らしくしてください。ずいぶん病気で苦しんだのですから、どうだったかというぐらいは問うてください。いいのに、あなたは問わない。今はじめてのことではないが私としては恨めしいことですよ」

と言った。

「問われないのは恨めしいものでしょうか」

こう言つて横に源氏のほうを見た目つきは恥ずかしそうで、そして気高けだかい美が顔に備わつていた。

「たまに言つてくださることがそれだ。情けないじゃありませんか。訪うて行かぬなどという間柄は、私たちのような神聖な夫婦の間柄とは違うのですよ。そんなことといつしよにして言うものじゃありません。時がたてばたつほどあなたは私を露骨ききめに軽蔑けいべつするようになるから、こうすればあなたの心持ちが直るか、そうしたら効果ききめがあるだろうかと私はいろんな試みをしているのですよ。そうすればするほどあなたはよそよそしくなる。まあいい。長い命さえあればよくわかつてもらえるでしょう」

と言つて源氏は寢室のほうへはいったが、夫人はそのままとの座にいた。就寝を促し



てみても聞かぬ人を置いて、歎息たんそくをしながら源氏は枕についていたというのも、夫人を動かすことにそう骨を折る気にはなれなかったのかもしれない。ただくたびれて眠いというふうを見せながらもいろいろな物思いをしていた。若草と祖母に歌われていた兵部卿の宮の小王女の登場する未来の舞台がしきりに思われる。年の不つりあいから先方の人たちが自分の提議を問題にしようとしなかったのも道理である。先方がそうでは積極的には出られない。しかし何らかの手段で自邸へ入れて、あの愛らしい人を物思いの慰めにながめていたい。兵部卿の宮は上品な艶えんなお顔ではあるがはなやかな美しさなどはおありにならないのに、どうして叔母君おばにそっくりなように見えたのだろう、宮と藤壺の宮とは同じお后きんぎからお生まれになったからであろうか、などと考えるだけでもその子と恋人との縁故の深さがうれしくて、ぜひとも自分の希望は実現させないではならないものであると源氏は思った。

源氏は翌日北山へ手紙を送った。僧都そうずへ書いたものにも女王にょおうの問題をほのめかして置かれたに違いない。尼君のには、

問題にしてくださいませんでしたあなた様に気おくれがいたしまして、思っております  
 こともことごとくは言葉に現わせませんでした。こう申しますだけでも並み並みでない

執心のほどをおくみ取りくださいましたらうれしいでしょう。などと書いてあった。別に小さく結んだ手紙が入れてあって、

「面<sup>おも</sup>かげは身をも離れず山ざくら心の限りとめてこしかど

どんな風が私の忘れることのできない花を吹くかもしれないと思うと気がかりです」

内容はこうだった。源氏の字を美しく思ったことは別として、老人たちは手紙の包み方などにさえ感心していた。困ってしまう。こんな問題はどうかお返事すればいいことかと尼君は当惑していた。

あの時のお話は遠い未来のことでございましたから、ただ今何とも申し上げませんが、と存じておりましたのに、またお手紙で仰せになりましたので恐縮いたしております。まだ手習いの難波津<sup>なにわづ</sup>の歌さえも続けて書けない子供でございますから失礼をお許しくださいませ、それにいたしましたしても、

嵐吹<sup>あらし</sup>く尾上<sup>をのへ</sup>のさくら散らぬ間を心とめけるほどのはかなさ

こちらこそたよりない気がいたします。

というのが尼君からの返事である。僧都の手紙にしるされたことも同じようであったから源氏は残念に思つて二、三日たつてから惟光これみつを北山へやろうとした。

「少納言しょうなごんの乳母めのとという人がいるはずだから、その人に逢つてあ詳しく私のほうの心持ちを伝えて来てくれ」

などと源氏は命じた。どんな女性にも関心を持つ方だ、姫君はまだきわめて幼稚であつたようのだのにと惟光は思つて、真正面から見たのではないが、自身がいっしょに隙見すきみをした時のことを思つてみたりもしていた。

今度は五位の男を使いにして手紙をもらったことに僧都は恐縮していた。惟光は少納言に面会を申し込んで逢つた。源氏の望んでいることを詳しく伝えて、そのあとで源氏の日常の生活ぶりなどを語つた。多弁な惟光は相手を説得する心で上手じょうずにいろいろ話したが、僧都も尼君も少納言も稚い女王わさなへの結婚の申し込みはどう解釈すべきであらうとあきれてるばかりだった。手紙のほうにもねんごろに申し入れが書かれてあつて、

一つずつ離してお書きになる姫君のお字をぜひ私に見せていただきたい。

ともあつた。例の中に封じたほうの手紙には、

浅香山浅くも人を思はぬになど山の井のかけ離るらん

この歌が書いてある。返事、

汲み初<sup>く</sup>めてくやしと聞きし山の井の浅きながらや影を見すべき

尼君が書いたのである。惟<sup>これみ</sup>光が聞いて来たのもその程度の返辞であつた。

「尼様の御容体が少しおよろしくなりましたら京のお邸<sup>やしき</sup>へ帰りますから、そちらから改めてお返事を申し上げることにいたします」

と言つていたというのである。源氏はたよらない気がしたのであつた。

藤壺の宮が少しお病氣におなりになつて宮中から自邸へ退出して来ておいでになつた。帝<sup>みかど</sup>が日々恋しく思<sup>おぼしめ</sup>召す御様子に源氏は同情しながらも、稀<sup>まれ</sup>にしかないお実<sup>さと</sup>家住まいの機会をとらえないではまたいつ恋しいお顔が見られるかと夢中になつて、それ以来どの恋人

の所へも行かず宮中の宿直所とのいどころでも、二条の院でも、昼間は終日物思いに暮らして、王命婦おうみやうぶに手引きを迫ることのほかは何もしなかった。王命婦がどんな方法をとったのか与えられた無理なわずかな逢瀬おうせの中なかにいる時も、幸福が現実の幸福とは思えないで夢としか思われないのが、源氏はみずから残念であった。宮も過去のある夜の思いがけぬ過失の罪悪感が一生忘れられないもののように思っておいでになって、せめてこの上の罪は重ねまいと深く思召したのであるのに、またもこうしたことを他動的に繰り返すことになったのを悲しくお思いになって、恨めしいふうでおありになりながら、柔らかな魅力があつて、しかも打ち解けておいでにならない最高の貴女の態度が美しく思われる源氏は、やはりだれよりもすぐれた女性である、なぜ一所でも欠点を持つておいでにならないのであろう、それであれば自分の心はこうして死ぬほどにまで惹かれひないで楽であろうと思つたと源氏はこの人の存在を自分に知らせた運命さえも恨めしく思われるのである。源氏の恋の万分の一も告げる時間のあるわけではない。永久の夜が欲しいほほどであるのに、逢わない時よりも恨めしい別れの時が至つた。

見てもまた逢あふ夜稀まれなる夢うちの中にやがてまぎるるわが身ともがな

涙にむせ返つて言う源氏の様子を見ると、さすがに宮も悲しくて、

世語りに人やつたへん類たぐひなく憂うれき身をさめぬ夢になしても

とお言いになった。宮が煩はんもん悶もんしておいでになるのも道理なことで、恋にくらんだ源氏の目にももつたいなく思われた。源氏の上着などは王命婦がかき集めて寢室の外へ持ってきた。源氏は二条の院へ帰つて泣き寝に一日を暮らした。手紙を出しても、例のとおり御覧にならぬという王命婦の返事以外には得られないのが非常に恨めしくて、源氏は御所へも出ず二、三日引きこもっていた。これをまた病気のように解釈あそばして帝がお案じになるに違いないと思うともつたいなく空恐ろしい気ばかりがされるのであった。

宮も御自身の運命をお歎なげきになつて煩悶が続き、そのために御病気の経過もよろしくないのである。宮中のお使いが始終来て御所へお帰りになることを促されるのであったが、なお宮は里居さとを続けておいでになった。宮は実際おからだが悩ましくて、しかもその悩ましさの中に生理的な現象らしいものもあるのを、宮御自身だけには思いあたることがない

のではなかった。情けなくて、これで自分は子を産むのであろうかと煩悶をしておいでになった。まして夏の暑い間は起き上がることもできずにお寝みになったきりだった。御妊娠が三月であるから女房たちも気がついてきたようである。宿命の恐ろしさを宮はお思いになつても、人は知らぬことであつたから、こんなに月が重なるまで御内奏もあそばされなかつたと皆驚いてささやき合つた。宮の御入浴のお世話などもきまつてしていた宮の乳母の娘である弁とか、王命婦とかだけは不思議に思うことはあつても、この二人の間でさえ話し合うべき問題ではなかつた。命婦は人間がどう努力しても避けがたい宿命というものに驚いていたのである。宮中へは御病氣やら物もの怪けやらで氣のつくことのおくれたように奏上したはずである。だれも皆そう思つていた。帝はいつその熱愛を宮へお寄せになることになつて、以前よりもおつかわしになるお使いの度数の多くなつたことも、宮にとつては空恐ろしくお思われになることだった。煩悶の合い間というものがなくなつた源氏の中将も変わった夢を見て夢解きを呼んで合わせさせてみたが、及びもない、思いもかけぬ占いをした。そして、

「しかし順調にそこへお達しになろうとするのにはお慎みにならなければならぬ故障が一つございます」

と言った。夢を現実にまざまざ続いたことのように言われて、源氏は恐怖を覚えた。

「私の夢ではないのだ。ある人の夢を解いてもらったのだ。今の占いが真実性を帯びるまではだれにも秘密にしておけ」

とその男に言ったのであるが、源氏はそれ以来、どんなことがおこってくるのかと思っていた。その後には源氏は藤壺の宮の御懷妊を聞いて、そんなことがあの占いの男に言われたことなのではないかと思うと、恋人と自分の間に子が生まれてくるということに若い源氏は昂奮して、以前にもまして言葉を尽くして逢瀬を望むことになったが、王命婦も宮の御懷妊になって以来、以前に自身が、はげしい恋に身を亡しかねない源氏に同情してとった行為が重大性を帯びていることに気がついて、策をして源氏を宮に近づけようとすることを避けたのである。源氏はたまさかに宮から一行足らずのお返事の得られたこともあるが、それも絶えてしまった。

初秋の七月になって宮は御所へおはいりになった。最愛の方が懷妊されたのであるから、帝のお志はますます藤壺の宮にそそがれるばかりであった。少しお腹がふっくりとなつて悪阻の悩みに顔の少しお痩せになった宮のお美しさは、前よりも増したのではないかと見えた。以前もそうであったように帝は明け暮れ藤壺にばかり来ておいでになって、もう音



樂の遊びをするのにも適した季節にもなっていたから、源氏の中将をも始終そこへお呼び出しになって、琴や笛の役をお命じになった。物思わしさを源氏は極力おさえていたが、時々には忍びがたい様子もうかがわれるのを、宮もお感じになって、さすがにその人にまつわるものの愁うれわしさを覚えになった。

北山へ養生に行っていた按察使大納言の未亡人は病が快よくなつて京へ歸つて来ていた。源氏は惟これみ光などに京の家を訪たずねさせて時々手紙などを送つていた。先方の態度は春も今も変わったところがないのである。それも道理に思えることであつたし、またこの数月間というものは、過去の幾年間にもまさつた恋の煩はん悶もんが源氏にあつて、ほかのことは何一つ熱心にしようとは思われないのもあつたりして、より以上積極性を帯びていくようでもなかつた。

秋の末になつて、恋する源氏は心細さを人よりも深くしみじみと味わつていた。ある月夜にある女の所を訪ねる氣にやつとなつた源氏が出かけようとするとさつと時雨しぐれがした。源氏の行く所は六条の京極辺であつたから、御所から出て来たものではやや遠い氣がする。荒れた家の庭の木立ちが大家たいけらしく深いその土塀どべいの外を通る時に、例の傍去そばぎらずの惟光が言つた。

「これが前の按察使大納言の家でございます。先日ちよつとこの近くへ来ました時に寄つてみますと、あの尼さんからは、病気に弱つてしまつていまして、何も考えられませんという挨拶がありました」

「気の毒だね。見舞いに行くのだった。なぜその時にそう言つてくれなかつたのだ。ちよつと私が訪問に来たがと言つてやれ」

源氏がこう言うので惟光は従者の一人をやつた。この訪問が目的で来たと最初言わせたので、そのあとでまた惟光がはいつて行つて、

「主人が自身でお見舞いにおいでになりました」

と言つた。大納言家では驚いた。

「困りましたね。近ごろは以前よりもずつと弱つていらつしやるから、お逢いにはなれないでしょうが、お断わりするのはもつたいたないことですから」

などと女房は言つて、南向きの縁座敷をきれいにして源氏を迎えたのである。

「見苦しい所でございますが、せめて御厚志のお礼を申し上げますとはと存じまして、思召おほしめしてもございませんでしょうが、こんな部屋へやなどにお通しいたしまして」

という挨拶あいさつを家の者がした。そのとおりで、意外な所へ来ているという気が源氏には

した。

「いつも御訪問をしたく思っているのですが、私のお願いをとつびなものか何かのよう  
にこちらではお扱いになるので、きまりが悪かったです。それで自然御病気もこんなに  
進んでいることを知りませんでした」

と源氏が言った。

「私は病気であることが今では普通なようになっております。しかしもうこの命の終わりに  
近づきましたおりから、かたじけないお見舞いを受けました喜びを自分で申し上げませ  
ん失礼をお許しくださいます。あの話は今後もお忘れになりませんでしたら、もう少し年  
のゆきました時にお願ひいたします。一人ぼっちになりますあの子に残る心が、私の参り  
ます道の障りさわになることかと思われまます」

取り次ぎの人に尼君が言いつけている言葉が隣室であつたから、その心細そうな声も絶  
え絶え聞こえてくるのである。

「失礼なことでございます。孫がせめてお礼を申し上げる年になっておればよろしいので  
ございませぬのに」

とも言う。源氏は哀れに思つて聞いていた。

「今さらそんな御挨拶ごあいさつはなさらないでください。通り一遍な考えでしたなら、風変わりな酔狂者すいきしょうものと誤解されるのも構わずに、こんな御相談は続きません。どんな前生の因縁でしょうか、女王さんをちよつとお見かけいたしました時から、女王さんのことをどうしても忘れられないようなことになりましたのも不思議なほどで、どうしてもこの世界だけのことでない、約束事としか思われません」

などと源氏は言つて、また、

「自分を理解していただけない点で私は苦しんでおります。あの小さい方が何か一言お言いになるのを伺えればと思うのですが」

と望んだ。

「それは姫君は何もご存じなしに、もうお寝やすみになつてしまつて」

女房がこんなふうと言つている時に、向こうからこの隣室へ来る足音がして、

「お祖母様ばあ、あのお寺にいらつしつた源氏の君が来ていらつしやるのですよ。なぜ御覧にならないの」

と女王は言つた。女房たちは困つてしまつた。

「静かにあそばせよ」

と言っていた。

「でも源氏の君を見たので病気がよくなったと言っていていらしたからよ」

自分の覚えているそのことが役に立つ時だと女王は考えている。源氏はおもしろく思っていて聞いていたが、女房たちの困りきったふうが気の毒になって、聞かない顔をして、まじめな見舞いの言葉を残して去った。子供らしい子供らしいというのはほんとうだ、けれども自分はよく教えていける気がすると源氏は思ったのであった。

翌日もまた源氏は尼君へ丁寧に見舞いを書いて送った。例のように小さくしたほうの手紙には、

いはけなき鶴たづの一声聞きしより葦間あしまになづむ船ぞえならぬ

いつまでも一人の人を対象にして考えているのですよ。

わざわざ子供にも読めるふうに書いた源氏のこの手紙の字もみごとなものであったから、そのまま姫君の習字の手本にしたらいいと女房らは言った。源氏の所へ少納言が返事を書いてよこした。

お見舞いくださいました本人は、今日も危あぶないようでございまして、ただ今から皆で山の寺へ移つてまいるところでございます。

かたじけないお見舞いのお礼はこの世界で果たしませんでもまた申し上げる時がございましょう。

というのである。秋の夕べはまして人の恋しさがつとつて、せめてその人に縁故のある少女を得られるなら得たいという望みが濃くなつていくばかりの源氏であつた。「消えん空なき」と尼君の歌つた晩春の山の夕べに見た面影が思い出されて恋しいとともに、引き取つて幻滅を感じるのではないかと危あやぶむ心も源氏にはあつた。

手に摘みていつしかも見ん紫の根に通ひける野のべ辺の若草

このころの源氏の歌である。

この十月に朱雀院すむくへ行幸があるはずだつた。その日の舞樂には貴族の子息たち、高官、殿上役人などの中の優秀な人が舞い人選ばれていて、親王方、大臣をはじめとして音楽の素養の深い人はそのために新しい稽古けいこを始めていた。それで源氏の君も多忙であつた。

北山の寺へも久しく見舞わなかつたことを思つて、ある日わざわざ使いを立てた。山からは僧都そうずの返事だけが来た。

先月の二十日にとうとう姉は亡なくなりまして、これが人生の掟おきてであるのを承知しながらも悲しんでおります。

源氏は今さらのように人間の生命の脆もろさが思われた。尼君が気がかりでならなかつたらしい小女王はどうしているだろう。小さいのであるから、祖母をどんなに恋しがつてばかりいることであろうと想像しながらも、自身の小さくて母に別れた悲哀も確かに覚えなかりに思われるのであつた。源氏からは丁寧な弔慰品が山へ贈られたのである。そんな場合にはいつも少納言が行き届いた返事を書いて来た。

尼君の葬式のあとのことが済んで、一家は京の邸やしきへ歸つて来ているということであつたから、それから少しあとに源氏は自身で訪問した。凄すこいように荒れた邸に小人数で暮らしているのであつたから、小さい人などは怖おそしい気がするものであろうと思われた。以前の座敷へ迎えて少納言が泣きながら哀れな若草を語つた。源氏も涙のこぼれるのを覚えた。

「宮様のお邸へおつれになることになっておりますが、お母様の御生前にいろんな冷酷なことをなさいました奥さまがいらつしやるのでございますから、それがいつそずっとお小

さいとか、また何でもおわかりになる年ごろになつていらつしやるとかすればいいのでございませうが、中途半端はんぱなお年で、おおせいお子様のいらつしやる中で軽い者にお扱われになることになつてはと、尼君も始終それを苦勞になさいましたが、宮様のお内のことを聞きますと、まったく取り越し苦勞でなさそうなのでございませうから、あなた様のお気まぐれからおつしやつてくださいますことも、遠い将来にまでにはたとえどうなりますにしても、お救いの手に違いないと私どもは思われますが、奥様になどとは想像も許されませんようなお子供らしさでございまして、普通のあの年ごろよりももつともつと赤あかさま様なのでございませう」

と少納言が言った。

「そんなことはどうでもいいじやありませんか、私が繰り返し繰り返しこれまで申し上げてあることをなぜ無視しようとなさるのですか。その幼稚な方を私が好きでたまらないのは、こればかりは前ぜん生しょうの縁に違いないと、それを私が客觀的に見ても思われます。許してくださいつて、この心持ちを直接女王さんに話させてくださいませんか。

あしわかぬ浦にみるめは難かたくともこは立ちながら帰る波かは



私をお見くびりになってはいけません」

源氏がこう言うど、

「それはもうほんとうにもつたいなく思っているのでございます。

寄る波の心も知らで和歌の浦に玉藻たまもなびかんほどぞ浮きたる

このことだけは御信用ができませんけれど」

物馴なれた少納言の応接のしように、源氏は何を言われても不快には思われなかつた。

「年を経てなど越えざらん逢坂あふさかの関」という古歌を口ずさんでいる源氏の美音に若い女房たちは酔つたような気持ちになつていた。女王は今夜もまた祖母を恋しがって泣いていた時に、遊び相手の童女が、

「直衣のうしを着た方が来ていらつしやいますよ。宮様が来ていらつしやるのでしよう」と言つたので、起きて来て、

「少納言、直衣着た方どちら、宮様なの」

こう言いながら乳母めのとのそばへ寄つて来た声がかわいかった。これは父宮ではなかったが、やはり深い愛を小女王に持つ源氏であつたから、心がときめいた。

「こちらへいらつしやい」

と言つたので、父宮でなく源氏の君であることを知つた女王は、さすがにうつかりとしたことを言つてしまつたと思うふうで、乳母のそばへ寄つて、

「さあ行こう。私は眠いのだもの」

と言う。

「もうあなたは私に御遠慮などしなくてもいいんですよ。私の膝ひざの上へお寝やすみなさい」

と源氏が言つた。

「お話しいたしましたとおりでございましょう。こんな赤様なのでございます」

乳母に源氏のほうへ押し寄せられて、女王はそのまま無心にすわつていた。源氏が御簾みすの下から手を入れて探つてみると柔らかい着物の上に、ふさふさとかかつた端の厚い髪が手に触れて美しさが思いやられるのである。手をとらえると、父宮でもない男性の近づいてきたことが恐ろしくて、

「私、眠いと言っているのに」

と言つて手を引き入れようとするのについて源氏は御簾の中へはいって来た。

「もう私だけがあなたを愛する人なんですよ。私をお憎みになつてはいけない」

源氏はこう言っている。少納言が、

「よろしくごさいません。たいへんでごさいます。お話しになりましたも何の効果もききめごさいませんでしようのに」

と困つたように言う。

「いくら何でも私はこの小さい女王さんを情人にしようとはしない。まあ私がどれほど誠実であるかを御覧なさい」

外にはみぞれ霙が降つていてすじ凄<sup>すじ</sup>い夜である。

「こんなに小人数でこの寂しい邸やしきにどうして住めるのですか」

と言つて源氏は泣いていた。捨てて歸つて行けない気がするのであつた。

「もう戸をおろしておしまいなさい。こわいような夜だから、私がとのい宿直とのいの男になりましたよ。女房方は皆女によわう王にやおうさんの室へ来ていらつしやい」

と言つて、馴なれたことのように女王さんを帳台の中へ抱いてはいつた。だれもだれも意外なことにあきれていた。乳母は心配をしながらも普通のちんにゆうしや闖入者ちんにゆうしやを扱あつかうようにはでき

ぬ相手に歎息たんそくをしながら控くわえていた。小女王は恐ろしがってどうするのかと慄ふるえているので肌はだも毛穴が立たっている。かわいく思う源氏はささやかな異性を単衣ひとえに巻まきくるんで、それだけを隔へてに寄り添よっていた。この所作がわれながら是認ししがたいものとは思おもいながらも愛情をこめていろいろと話わしていた。

「ねえ、いらつしやいよ、おもしろい絵がたくさんある家で、お雛ひな様遊あびなんかのよくてきる私の家うちへね」

こんなふううに小さい人の氣に入るような話をしてくれる源氏の柔らかい調子に、姫君は恐ろしさから次第に解放か放はされていった。しかし不氣味であることは忘れずに、眠り入ることことはなくて身じろぎしながら寝ねていた。この晩は夜通し風が吹き荒あれていた。

「ほんとうにお客様がお泊まりにならなかつたらどんなに私たちは心細こかつたでしょう。同じことなら女王様がほんとうの御結婚のできるお年であればね」

などと女房たちはささやいていた。心配でならない乳母は帳台の近くに侍まっていた。風の少し吹きやんだ時はまだ暗くかったが、帰る源氏はほんとうの恋人のもとを別わかれて行く情景けいに似にていた。

「かわいそうな女王さんとこんなに親おしくなつてしまつた以上、私はしばらくの間もこん

な家へ置いておくことは気がかりでたまらない。私の始終住んでいる家へお移ししよう。

こんな寂しい生活をばかりしていらつしやつては女王さんが神経衰弱におなりになるから」と源氏が言った。

「宮様もそんなにおつしやいますが、あちらへおいでになることも、四十九日が済んでからがよろしかろうと存じております」

「お父様のお邸ではあつても、小さい時から別の所でお育ちになつたのだから、私に對するお気持ちと親密さはそう違わないでしょう。今からいつしよにいたことが将来の障りになるようなことは断じてない。私の愛が根底の深いものになるだけだと思う」

と女王の髪を撫でながら源氏は言つて顧みながら去つた。深く霧に曇つた空も艶であつて、大地には霜が白かつた。ほんとうの恋の忍び歩きにも適した朝の風景であると思うと、源氏は少し物足りなかつた。近ごろ隠れて通つている人の家が途中にあるのを思い出して、その門をたたかせたが内へは聞こえないらしい。しかたがなくて供の中から声のいい男を選んで歌わせた。

朝ぼらけ霧立つ空の迷ひにも行き過ぎがたき妹が門かな

二度繰り返させたのである。気のきいたふうをした下仕えしもづかの女中を出して、

立ちとまり霧の籬まがきの過ぎうくば草の戸ざしに障りさはしもせじ

と言わせた。女はすぐに門へはいつてしまった。それきりだれも出て来ないので、帰つてしまうのも冷淡な気がしたが、夜がどんどん明けてきそうので、きまりの悪さに二条の院へ車を進めさせた。

かわいかった小女王を思い出して、源氏は独りひと笑みえをしながら又寝またねをした。朝おそくなつて起きた源氏は手紙をやろうとしたが、書く文章も普通の恋人扱あつかいにはされないので、筆を休め休め考えて書いた。よい絵なども贈った。

今日は按察使大納言家へ兵部卿ひょうぶきょうの宮が来ておいでになつた。以前よりもずっと邸が荒れて、広くて古い家に小人数でいる寂しさが宮のお心を動かした。

「こんな所にしばらくでも小さい人がいられるものではない。やはり私の邸のほうへつれて行こう。たいしたむずかしい所ではないのだよ。乳母めのとは部屋へやをもらつて住んでいればい

いし、女王は何人も若い子がいるからいつしよに遊んでいれば非常にいいと思う」

などとお言いになった。そばへお呼びになった小女王の着物には源氏の衣服の匂いにおが深く沁しんでいた。

「いい匂いだね。けれど着物は古くなっているね」

心苦しく思おぼしめ召めす様子だった。

「今までからも病身な年寄りとはかりいつしよにいるから、時々は邸のほうへよこして、母と子の情合いのできるようにするほうがよいと私は言ったのだけれど、絶対的にお祖母ばあさんはそれをおさせにならなかつたから、邸のほうでも反感を起こしていた。そしてついにその人が亡なくなつたからといってつれて行くのは済まないような気もする」

と宮がお言いになる。

「そんなに早くあそばす必要はございませんでしょう。お心細くても当分はこうしていらつしやいますほうがよろしゅうございましょう。少し物の理解がおできになるお年ごろになりましてからおつれなさいますほうがよろしいかと存じます」

少納言はこう答えていた。

「夜も昼もお祖母様ばあが恋しくて泣いてばかりいらつしやいまして、召し上がり物なども少

のうございます」

とも歎なげいていた。實際姫君は瘦やせてしまつたが、上品な美しさがかえつて添よつたかのように見える。

「なぜそんなにお祖母様のことばかりをあなたはお思いになるの、亡なくなつた人はしかたがないですよ。お父様がおればいいのだよ」

と宮は言つておいでになつた。日が暮れるとお帰りになるのを見て、心細がつて姫君が泣くと、宮もお泣きになつて、

「なんでもそんなに悲しがつてはしかたがない。今日明日にでもお父様の所へ来られるようにしよう」

などと、いろいろにだめて宮はお帰りになつた。母も祖母も失つた女の将来の心細さなどを女王は思うのでなく、ただ小さい時から片時の間も離れず付き添よつていた祖母が死んだと思うことだけが非常に悲しいのである。子供ながらも悲しみが胸をふさいでいる気がして遊び相手はいても遊ぼうとしなかつた。それでも昼間は何かと紛まれてるのであつたが、夕方ごろからめいりこんでしまう。こんなことで小さいおからだがどうなるかと思つて、乳母も毎日泣いていた。その日源氏の所からは惟これみつ光をよこした。



伺うはずですが宮中からお召しがあるので失礼します。おかわいそうに拝見した女王さんのことが気になってなりません。

源氏からの挨拶あいさつはこれで惟光が代わりの宿直とくのいをするわけである。

「困ってしまう。将来だれかと御結婚をなさらなければならぬ女王様を、これではもう源氏の君が奥様になすったような形をお取りになるのですもの。宮様がお聞きになったら私たちの責任だと言っておしかりになるでしょう」

「ねえ女王様、お気をおつけになつて、源氏の君のことは宮様がいらつしやいました時にうっかり言っておしまいにならないようになさいませね」

と少納言が言つても、小女王は、それが何のためにそうしなければならぬかがわからないのである。少納言は惟光の所へ来て、身にしむ話をした。

「将来あるいはそうおなりあそばす運命かもしれませんが、ただ今のところはどうしてもこれは不つりあいなお間柄だと私らは存じますのに、御熱心に御縁組のことをおつしやるのですもの、御酔興か何かと私どもは思うばかりでございます。今日も宮様がおいでになりまして、女の子だからよく気をつけてお守りをせい、うっかり油断をしてはいけませんなどとおつしやいました時は、私ども何だか平気でいられなく思われました。昨晚のこ

となんか思い出すものですから」

などと言いながらも、あまりに歎なげいて見せては姫君の処女であることをこの人に疑わせることになるかと用心もしていた。惟光もどんな関係なのかわからない気がした。帰って惟光が報告した話から、源氏はいろいろとその家のことが哀れに思いやられてならないのであったが、形式的には良人おととらしく一泊したあとであるから、続いて通って行かねばならぬが、それはさすがに躑ちゆうちよ躑ちゆうちよされた。酔興な結婚をしたように世間が批評しそうな点もあるので、心がおけて行けないのである。二条の院へ迎えるのが良策であると源氏は思った。手紙は始終送った。日が暮れると惟光を見舞いに出した。

やむをえぬ用事があつて出かけられないのを、私の不誠実さからだと思いにならぬかと不安です。

などという手紙が書かれてくる。

「宮様のほうから、にわかにも明日迎えに行くと言つておよこしになりましたので、取り込んでおります。長い馴染なじみの古いお邸やしきを離れますのも心細い気のことと私もめいめい申し合つております」

と言葉数も少なく言つて、大納言家の女房たちは今日はゆっくりと話し相手になつてい

なかつた。忙しそうに物を縫ったり、何かを仕度したくしたりする様子がよくわかるので、惟これみ光は帰って行つた。源氏は左大臣家へ行つていたが、例の夫人は急に出て来て逢あおうともしなかつたのである。面倒めんどうな気がして、源氏は東あづま琴こと（和琴わじんに同じ）を手すさびに弾ひいて、「常陸ひたちには田をこそ作れ、仇あだ心こころかぬとや君が山を越え、野を越え雨夜あまよ来ませる」という田舎いなかめいた歌詞を、優美な声で歌つていた。惟光が来たというので、源氏は居間へ呼んで様子を聞こうとした。惟光によつて、女王が兵部ひょうぶ卿きやうの宮邸へ移転する前夜であることを源氏は聞いた。源氏は残念な気がした。宮邸へ移つたあとで、そういう幼い人に結婚を申し込むということも物好きに思われることだろう。小さい人を一人盗んで行つたという批難を受けるほうがまだよい。確かに秘密の保ち得られる手段を取つて二条の院へつれて来ようと源氏は決心した。

「明日夜明けにあすこへ行つてみよう。ここへ来た車をそのままにして置かせて、隨身を一人か二人仕度させておくようにしてくれ」

という命令を受けて惟光は立つた。源氏はそののちもいろいろと思ひ悩んでいた。人の娘を盗み出した噂うわさの立てられる不名誉も、もう少しあの人ひとが大人で思ひ合つた仲であればその犠牲も自分は払つてよいわけであるが、これはそうでもないのである。父宮に取りも

どされる時の不体裁も考えてみる必要があると思つたが、その機会をはずすことはどうしても惜しいことであると考えて、翌朝は明け切らぬ間に出かけることにした。

夫人は昨夜の気持ちのままにまだ打ち解けてはいなかつた。

「二条の院にぜひしなければならぬことのあつたのを私は思い出したから出かけます。用を済ませたらまた来ることにしましょう」

と源氏は不機嫌ふきげんな妻に告げて、寢室をそつと出たので、女房たちも知らなかつた。自身の部屋になつているほうで直衣のうしなどは着た。馬に乗せた惟光だけを付き添いにして源氏は大納言家へ来た。門をたたくと何の気なしに下男が門をあけた。車を静かに中へ引き込ませて、源氏の伴つた惟光が妻戸をたたいて、しわぶきをすると、少納言が聞きつけて出て来た。

「来ていらつしやるのです」

と言つと、

「女王様はやすんでいらつしやいます。どちらから、どうしてこんなにお早く」

と少納言が言う。源氏が人の所へ通つて行つた帰途だと解釈しているのである。

「宮様のほうへいらつしやるそうですから、その前にちよつと一言お話をしておきたいと

思つて」

と源氏が言った。

「どんなこととございましょう。まあどんなに確かなお返辞がおできになりますことやら」  
少納言は笑つていた。源氏が室内へはいつて行こうとするので、この人は当惑したらしい。

「不行儀に女房たちがやすんでおりまして」

「まだ女王さんはお目ざめになつていないのでしょうか。私がお起こししましょう。もう朝霧がいつぱい降る時刻なのに、寝ているというのは」

と言いながら寢室へはいる源氏は止めることもできなかつた。源氏は無心によく眠つていた姫君を抱き上げて目をさませた。女王は父宮がお迎えにおいでになつたのだと、まだまつたくさめない心では思つていた。髪を撫なでて直したりして、

「さあ、いらつしやい。宮様のお使いになつて私が来たのですよ」

と言う声を聞いた時に姫君は驚いて、恐ろしく思うふうに見えた。

「いやですね。私だつて宮様だつて同じ人ですよ。鬼などであるものですか」

源氏の君が姫君をかかえて出て来た。少納言と、惟これみつ光と、外の女房とが、

「あ、どうなさいます」

と同時に言った。

「ここへは始終来られないから、気楽な所へお移ししようと言ったのだけれど、それには同意をなさらないで、ほかへお移りになることになったから、そちらへおいでになってはいろいろ面めんどう倒だから、それでなのだ。だれか一人ついておいでなさい」

こう源氏の言うのを聞いて少納言はあわててしまった。

「今日では非常に困るかと思えます。宮様がお迎えにおいでになりました節、何とも申し上げようがないではございませんか。ある時間がたちましてから、ごいっしょにおなりになる御縁があるものでございましたら自然にそうなることでございましょう。まだあまりに御幼少でいらつしやいますから。ただ今そんなことは皆の者の責任になることでござい  
ますから」

と言うと、

「じやいい。今すぐについて来られないのなら、人はあとで来るがよい」

こんなふうに通つて源氏は車を前へ寄せさせた。姫君も怪しくなつて泣き出した。少納言は止めようがないので、昨夜縫つた女王の着物を手にさげて、自身も着がえをしてから

車に乗った。

二条の院は近かったから、まだ明るくならないうちに着いて、西の対に車を寄せて降りた。源氏は姫君を軽そうに抱いて降ろした。

「夢のような気でここまでは参りましたが、私はどうしたら」

少納言は下車するのを躊躇ちゆうちよした。

「どうでもいいよ。もう女王さんがこちらへ来てしまったのだから、君だけ帰りたければ送らせよう」

源氏が強かった。しかたなしに少納言も降りてしまった。このにわかの変動に先刻から胸が鳴り続けているのである。宮が自分をどうお責めになるだろうと思うことも苦勞の一つであった。それにしても姫君はどうなっておしまいになる運命なのであるろうと思つて、ともかくも母や祖母に早くお別れになるような方は紛れもない不幸な方であることがわかれると思うと、涙がとめどなく流れそうであつたが、しかもこれが姫君の婚家へお移りになる第一日であると思うと、縁起悪く泣くことは遠慮しなくてはならないと努めていた。

ここは平生あまり使われない御殿であつたから帳ちようだい台なども置かれてなかつた。源氏は惟光これみつを呼んで帳台、屏風びやうぶなどをその場所場所に据すえさせた。これまで上へあげて掛

けてあつた几帳きちようの垂れ絹たはおろせばいいだけであつたし、畳の座なども少し置き直すだけで済んだのである。東の対へ夜着類を取りにやって寝た。姫君は恐ろしがって、自分はどうするのだろうかと思ふと慄ふるえが出るのであつたが、さすがに声を立てて泣くことはしなかつた。

「少納言の所で私は寝るのよ」

子供らしい声で言う。

「もうあなたは乳母めのとなどと寝るものではありませんよ」

と源氏が教えると、悲しがって泣き寝をしてしまった。乳母は眠ることもできず、ただむやみに泣かれた。

明けてゆく朝の光を見渡すと、建物や室内の装飾はいうまでもなくりっぱで、庭の敷き砂なども玉を重ねたもののように美しかった。少納言は自身が貧弱に思われてきまりが悪かつたが、この御殿には女房がいなかつた。あまり親しくない客などを迎えるだけの座敷になつていたから、男の侍だけが縁の外で用を聞くだけだった。そうした人たちは新たに源氏が迎え入れた女性のあるのを聞いて、

「だれだろう、よほど好きな方なんでしょう」



などとささやいていた。源氏の洗面の水も、朝の食事もちちらへ運ばれた。遅おそくなってから起きて、源氏は少納言に、

「女房たちがいないでは不自由だろうから、あちらにいた何人かを夕方ごろに迎えにやればいい」

と言つて、それから特に小さい者だけが来るようにと東の対たいのほうへ童女を呼びにやつた。しばらくして愛らしい姿の子が四人来た。女王は着物にくるまつたままでまだ横になつていたのを源氏は無理に起こして、

「私に意地悪をしてはいけませんよ。薄情な男は決してこんなものじゃありませんよ。女は気持ちの柔らかかなのがいいのですよ」

もうこんなふうに教え始めた。姫君の顔は少し遠くから見ている時よりもずっと美しかった。気に入るような話をしたり、おもしろい絵とか遊び事をする道具とかを東の対へ取りにやるとかして、源氏は女王の機嫌きげんを直させるのに骨を折つた。やつと起きて喪服のやや濃い鼠ねずみの服の着古して柔らかになつたのを着た姫君の顔に笑えみが浮かぶようになると、源氏の顔にも自然笑みが上つた。源氏が東の対へ行つたあとで姫君は寢室を出て、木立ちの美しい築つきやま山や池のほうなどを御簾みすの中からのぞくと、ちようど霜枯れ時の庭の植え込

みが描いた絵のようによく、平生見ることの少ない黒の正装をした四位や、赤を着た五位の官人がまじりまじりに出は入りしていた。源氏が言っていたようにほんとうにここはよい家であると女王は思った。屏風にかかれたおもしろい絵などを見てまわって、女王はたよりない今日の心の慰めになっているらしかった。

源氏は二、三日御所へも出ずにこの人をなつけるのに一所懸命だった。手本帳に綴じさせるつもりの字や絵をいろいろに書いて見せたりしていた。皆美しかった。「知らねどもむさし野と云へばかこたれぬよしやさこそは紫の故」という歌の紫の紙に書かれたことによくできた一枚を手にとって姫君はながめていた。また少し小さい字で、

ねは見ねど哀れとぞ思ふ武蔵野の露分けわぶる草のゆかりを

とも書いてある。

「あなたも書いてごらんなさい」

と源氏が言うと、

「まだよくは書けませんの」

見上げながら言う女王の顔が無邪気でかわいかったから、源氏は微笑をして言った。

「まずくても書かないのはよくない。教えてあげますよ」

からだをすぼめるようにして字をかこうとする形も、筆の持ち方の子供らしいのもただかわいくばかり思われるのを、源氏は自分の心ながら不思議に思われた。

「書きそこねたわ」

と言つて、恥ずかしがつて隠すのをしいて読んでみた。

かこつべき故を知らねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらん

子供らしい字ではあるが、将来の上達が予想されるような、ふつくりとしたものだった。死んだ尼君の字にも似ていた。現代の手本を習わせたならもつとよくなるだろうと源氏は思った。雛<sup>ひな</sup>なども屋根のある家などもたくさんに作らせて、若紫の女王と遊ぶことは源氏の物思いを紛らすのに最もよい方法のようだった。

大納言家に残っていた女房たちは、宮がおいでになった時に御挨拶<sup>ごあいさつ</sup>のしようがなくて困った。当分は世間へ知らせずにおこうと、源氏も言っていたし、少納言もそれと同感な

のであるから、秘密にすることをくれぐれも言つてやつて、少納言がどこかへ隠したように申し上げさせたのである。宮は御落胆あそばされた。尼君も宮邸へ姫君の移つて行くことを非常に嫌きらつていたから、乳母の出すぎた考えから、正面からは拒こばまずにおいて、そつと勝手に姫君をつれ出してしまったのだとお思ひになつて、宮は泣く泣くお歸りになつたのである。

「もし居所がわかつたら知らせてよこすように」

宮のこのお言葉を女房たちは苦しい気持ちで聞いていたのである。宮は僧都そうずの所へも捜しにおやりになつたが、姫君の行くえについては何も得る所がなかつた。美しかつた小女王の顔をお思ひ出しになつて宮は悲しんでおいでになつた。夫人はその母君をねたんでいた心も長い時間に忘れていつて、自身の子として育てるのを楽しんでたことが水泡すいほうに歸したのを残念に思つた。

そのうち二条の院の西の対に女房たちがそろつた。若紫のお相手の子供たちは、大納言家から来たのは若い源氏の君、東の対のはきれいな女王といつしよに遊べるのを喜んだ。若紫は源氏が留守るすになつたりした夕方などには尼君を恋しがつて泣きもしたが、父宮を思ひ出すふうもなかつた。初めから稀まれまれ々にしか見なかつた父宮であつたから、今は第二の

父と思つている源氏にばかり馴染なじんでいった。外から源氏の歸つて来る時は、自身がだれよりも先に出迎えてかわいふうにいろいろな話をして、懐ふところの中に抱かれて少しもきまり悪くも恥ずかしくも思わない。こんな風変わりな交情がここにだけ見られるのである。

大人の恋人との交渉には微妙な面めんどう倒たうがあつて、こんな障害で恋までもそこねられるのではないかと我ながら不安を感じるこゝろがあつたり、女のほうはまた年じゆう恨み暮らしに暮らすことになつて、ほかの恋がその間に芽ばえてくることにもなる。この相手にはそんな恐れは少しもない。ただ美しい心の慰めであるばかりであつた。娘というものも、これほど大きくなれば父親はこんなにも接近して世話ができず、夜も同じ寢室にはいることは許されないわけであるから、こんなおもしろい間柄というものはないと源氏は思つてゐるのである。



# 青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：Juki、多羅尾伴内

2003年6月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 源氏物語

## 若紫

2020年 7月18日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>